



△△△
過度自由化の芽つんだ中国
 △△△
 去る三月下旬、サッチャー英首相のモスクワ訪問時に、私はたまたまモスクワにいた。サッチャー女史はかねてから大のゴルバチョフ・ファンであったが、今回も大いに意気投合していた様子が先明に報じられていたが、この「ヨーロッパからゴルバチョフ・ソ連を眺めてみる」という「ソ連政権下のワシントンや総じてソ連不信感の根強い裏から見た」とは違った映像が描かれる。

くも二年その意欲的な内外政策がいわゆる「レストロイカ」（根本改革）という言葉で知られるようになった今日、わが国においても、当初の懐疑的な評価が肯定的な評価へと転じているのは、ソ連認識の一步前進として受けとめることができよう。

同じ社会主義大国ながら、時期的にはゴルバチョフ改革に先行していた中国の鄧小平改革が大いに喧伝されてきた過去数年間、中国はソ連よりも一足先に根本的な体制改革を成し遂げ、社会主義からも離脱して「西側化」するのではないかと、といった

中ソの「改革」と「和解」の動き

首相は訪米時、視野に入れよ

期待ないしは思い込みがわが国にも存在した。しかし、去る一月中旬の胡耀邦解任ラマで、そのような単純な見方が是正されつつあると、中国認識の一步前進だといえる。

期待ないしは思い込みがわが国にも存在し指摘している。

一人当たりGNPが依然として三〇〇米前後であるとして、工業化の潜在的基盤を欠如している中国が、圧倒的な農業社会の面貌から脱却するには、またまた途方もない道のりをたどらねばならず、毛沢東政治の枠から脱ぎ出段としての表面的な「西側化」を必要とするか見えたのは、いわば現象面にすぎない。中国が本格的な「西側化」を内面的に志向するまでには、あと数十年の歳月を要するだろう。そ

保守派の勢力拡大という枠内で改革を進める方向へと転じたことを高く評価している。この点でも中ソ間には共通の基盤が回復されつつあると見なければならぬ。

△△△ 両国周辺の国際環境変化

それだけに、今後、中ソ関係の改善にはさらに二層の拍車がかかるだろう。中ソ間の相互依存・相互補完関係も著しく進展すると思われる。この点で、去る四月七日、トロヤノフスキ駐中国ソ連大使が、

東京外語大学教授 中嶋 嶺雄



ゴルバチョフ登場以来、世界戦略上の非ブレンヌ化を推進しつつあるソ連は、アフガニスタンからの一部撤兵を昨秋以来開始したに続いて、この四月十六日には、懸案のモンゴル駐留ソ連軍の第一陣撤兵が実現した。中国側がこの措置を大いに歓迎しているであろうとは、去る四月十一日の新華社電がモンゴルからの撤兵開始を速報していたことでもつかえよう。

一方、いわゆる中ソ関係改善のための「三大障害」のうち最も重視されていたベトナム軍のカンボジア駐留に関しては、依然として問題の解決にはいたっていないものの、カンボジア問題の政治的解決への展望も徐々に切り開かれてきた。去る三月中旬にシエウルでソ連外相がベトナムを訪問して以来、ベトナム側は中国との関係正常化をより一層強調しつつあり、中国側が関係正常化の前提にしていたカンボジア問題で中国と交渉の用意があることを初めて表明したことも無視できない。

近い将来の中ソ両党関係修復の可能性を北京で表明したことも示唆的であるが、それ以上に注視すべきは、このところ中ソ関係の改善を妨げていたと一般的に見なされてきた中ソ両国周辺の国際関係が大きく変動していることである。

それは、ゴルバチョフ書記長の画期的なウラジオストク演説（昨年七月）を契機とする中ソ両国をめぐる国際環境の再編が、いよいよ本格化しつつあるといつてもよいだろう。

このように中ソ関係をめぐる国際環境の変化のなかで、中ソ両国間の国境交渉が去る三月に九年ぶりに再開され、今秋の第一回国境会談へと引きつけられることになったが、この問題では、ソ連側の譲歩による妥結も期待できなくなってきた。この四月中旬には中ソ関係正常化のための第十四回外務次官級協議がモスクワで開かれていたが、さらに五月後半には、中国で現在もつとめ注目されているニュー・リーダーの一人で知ソ派ナンバーワンの李鵬副首相が訪ソし、ゴルバチョフ書記長と会談する予定だ。

このように、いまユーラシア大陸東辺には、ゆるやかな社会主義同盟関係が回復されつつあるのだといえる。

中曽根首相は、今回の訪米に際し、このように中ソ両国の新しい動きを視野に入れておへんではなからうか。